小学生における育児不全に関する意識調査 (2)

○飯島博之¹・吉森丹衣子²・守谷賢二³・小野 淳⁴・斎藤富由起⁴
 (1)練馬区総合教育センター・(2)法政大学大学院・(3)文教大学大学院・(4)千里金蘭大学)
 キーワード: 小学生, 高学年, 育児不全

Survey attitudes toward child-rearing inadequacy in elementary school children (2)

Hiroyuki Iijima¹, Taeko Yoshimori², Kenji Moriyai³, Atsushi Ono⁴, Fuyuki Saito⁴

(¹Nerimaku general educational center, ²Graduate School of Hosei Univ., ²Graduate School of Bunkyo Univ., ⁴Senrikinran Univ)

Key words: elementary school students, senior children at elementary school, child-rearing inadequacy

目 的

現在, 児童虐待は深刻な社会問題となっており, 教育現場においても大きな問題となっている。児童虐待の背景要因にはさまざまなものが指摘されており, 2005 年の東京都の調査によれば, 「ひとり親家庭」, 「夫婦間不和」, 「育児疲れ」などが背景として上位に挙げられている。

児童虐待において, 必ずつきまとう問題として「しつけ」の問題がある。この区別は非常に難しく, 児童虐待問題研究会(2008)は, “しつけとは, 子どもの欲求や理解度に配慮しながら, 基本的な生活習慣・生活能力, 他人への思いやりや社会のルール・マナーなどを身につけるよう働きかけること”であり, 子どもの人権を無視し, 暴力で, 親に従わせようとするのではない。たとえ親がしつけと考えていたとしても, 親の考えに関係なく, その行為が子どもの心身を傷つけ, 健やかな成長, 発達を損なう場合は虐待である”としている。また, 「しつけ」の延長が「虐待」である(黒川, 2005)という指摘もあり, 両者の区別は非常に難しい点がある。もし仮に, 「しつけ」と「虐待」を連続的捉えた場合, 「しつけ」の範囲を超えているが, 「虐待」までとはいかないという状態も存在するであろう。本研究ではこのような状態を「育児不全」と捉え, こうした育児不全がどの程度生じているかについて, 検討を行うことを目的とする。守谷ら(2010)は, 低学年の育児不全について検討を行っており, 本研究では小学4年生から6年生までの高学年を対象に検討を行う。

方 法

調査対象

関東郊外の小学校2校の高学年を対象に生活アンケートを実施した。内訳は, 小学4年生(男子39名, 女子28名), 5年生(男子30名, 女子36名, 不明1名), 6年生(男子29名, 女子31名, 不明1名)であった。

調査方法

担任の先生を通して, 生活アンケートを実施してもらい, 必要に応じて担任の先生に解説をしてもらいながら実施した。

調査内容

全部で11個の内容について質問を行った。本研究では, このうち育児不全に関連すると思われる質問についてのみ検討を行う。具体的には, 「1週間のうち朝食を食べない日」, 「朝食を作る人」, 「悲しいことや困ったことを保護者に話をするか」, 「保護者から叱られることがあるか」, 「叱られる場合, その方法」, 「叱られない場合, その理由」についてそれぞれいくつかの選択肢の中から複数回答により回答を求めた。

結 果

1週間の朝食の回数について, 「毎日食べる」, 「1, 2日食べない」, 「3~5日食べない」, 「6~7日食べない」の中か

ら回答を求めた結果, 「毎日食べる」という生徒は87%, 「1, 2日食べない」という児童が10%, 「3~5日食べない」生徒が2%, 「6~7日食べない」生徒が1%であった。また, 誰が作っているかについては, 「買ってきたもの」と回答した児童が2名(1%), 「自分」と回答した児童が13名(7%)見られた。

次に, 「悲しいことや困ったことを保護者に話をするか」について質問をした結果, 父親については, 4年生43%, 5年生33%, 6年生37%であり, 40%前後の児童が父親に話をすると回答した。母親については, 4年生82%, 5年生72%, 6年生71%で, 75%前後の児童が母親に悲しいことや困ったことについて話をすることが明らかになった。

「保護者から叱られることがあるか」について質問をした結果, 4年生99%, 5年生96%, 6年生97%であった。「叱られる方法」について, 8つの方法から複数回答により回答を求めた結果, 「やさしく叱られる」が26%, 「目を見て厳しく叱られる」が51%, 「兄弟と比べて叱られる」が38%, 「おまえなんかいい方がよいと叱られる」が3%, 「頭や手をぶたれる」が26%, 「足や体を足で蹴られる」が10%, 「ご飯をもらえない」が1%, 「話してもらえない」が14%であった。また, 「叱られない」と回答した児童(6名; 3%)にその理由を5つの選択肢の中から複数回答により回答を求めた結果, 「叱られるようなことはしない」が100%, 「叱られないように気をつけている」が50%, 「お父さんやお母さんが忙しくて話す時間がない」, 「自分を怖がっている」, 「お父さんやお母さんは自分とあまり話そうとしない」はすべて0%であった。

考 察

小学生高学年の児童を対象に, 生活アンケートを実施して, 育児不全に関する項目について検討を行った結果, 守谷ら(2010)の結果と比較すると, 朝食については, 毎日食べるという児童は若干減少し, 食べない割合, 家族以外の人を作る割合は増加する傾向が見られた。悲しいことや困ったことを話す割合については, 父母ともに大きな違いは見られなかった。叱られる割合については, 低学年に比べると, 大きく上昇し, 方法については, ぶたれたり, 蹴られたりする割合は減少するものの, 一定の割合で存在することが明らかになった。

引用文献

- ・黒川昭登(2005). 児童虐待の心理治療 朱鷺書房
- ・児童虐待問題研究会(2008). Q&A 児童虐待防止ハンドブック ぎょうせい
- ・守谷賢二・飯島博之・吉森丹衣子・小野淳・斎藤富由起(2010). 小学生における育児不安に関する意識調査(1) 日本心理学会第74回大会発表論文集